渋沢新聞

1年 A組
澁井 千晶
豊塚中学校
R6 8月21日

近代日本経済の父 渋沢栄一

「外国に負けない国をつくるため、日本は経済を発展させる必要があった。渋沢は、幕末から昭和にかけて日本の経済界をリードし、民間の立場から日本を発展させた人物。」

一八四〇年二月一三日現在の埼玉県深谷市血洗島に生まれる。二四歳で故郷を離れ、一橋慶喜に仕えたあと、慶喜が徳川一五代目征夷大将軍に就任すると渋沢は幕府の家臣となる。一橋家の財政の改善などに実力を発揮し次第に認められた。

渋沢が二七歳のとき、パリ万博親善使節として派遣された清水昭武（慶喜の弟）に同伴してパリに渡った。初めてパリのガス灯を目にした渋沢は近代化都市の象徴として街を輝かせていたガス灯の美しさに感銘を受けた。また、フランス人銀行員フリュリ・エラールに出会い、フランスの繁栄を支えている資本主義経済（資本家や経営者は投資家が出したお金で労働者を雇い商売や事業を行い利益を出す。労働者は労働の対価として給料を得る。投資家は利益が出たら配当金をもらう仕組み）を学んだ。

この資本主義の仕組みを日本で広めたいと渋沢は考えた。

明治維新によりフランスから帰国した。

日本経済の父渋沢 年表

1940 現在の埼玉県深谷市血洗島に生まれる
1864 一橋慶喜に仕える
1866 幕臣となる
1867 フランスへ出立（パリ万博使節）
1868（明治） 明治維新により帰国
1873 第一国立銀行 抄紙会社を創立
1917 日米協力創立 名誉副会長
1918 渋沢栄一著『徳川慶喜公伝』刊行
1923 関東大震災 大震災善後
1927（昭和） 青い目の人形が送られる
1931 11月11日 91歳で死去

株式の取り入れ

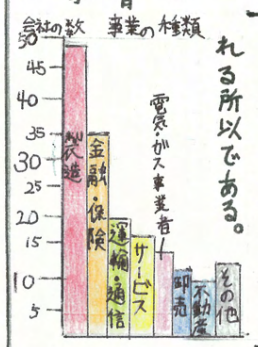
帰国した渋沢は、静岡藩に「商法会所」を設立した。明治政府に仕え、民部省改正掛掛長を兼ねる。政府の役人として官営富岡製糸場の設立に関わった。

三三歳のとき大蔵省を辞職して実業界に進出、日本初の株式会社第一国立銀行（ここでいう国立とは国の条例に基づくという意味）を開業し、総監役になる。そのほかにも抄紙会社創立（のちに王子製紙会社・取締役会長）になる。

女子に学問は不要とされてきた時代に女子教育に注力し、日本女子大学校や東京女学館の創立にも関与した。

渋沢が関わった約五〇〇社のうち約六割の会社は、合併、国有化等を経て何らかの形で現在も事業を継続している。例えば王子製紙・東洋紡績などのように社名が変わっている場合もあるが、現在も多くの会社が存続している。

このように渋沢は、銀行や多くの株式会社を創り、明治時代の日本の経済を発展させた。「近代日本経済の父」と言われる所以である。



社会復興に尽力

一九二三年の関東大震災後、渋沢自身も被災したにも関わらず「わたしのような老人は、こういうときにいささかなりと働いてこそ、生きている申し訳がたつようなものだ。」と話し、民の立場から「大震災善後会」を発足し義援金を募った。また海外にも呼びかけ、大企業関係者、経済界、商工会議所などの重要人物に電報を打ち、アメリカからは一三万ドル（現在の日本円で約七億円）を超える義援金が寄せられた。さらに、人脈を活かして臨時の病院や炊き出し、避難所などの対策に取り組み、社会復興に尽力した。

国際交流

アメリカの宣教師シドニー・ルイス・ギューリックは、次世代を担う日米両国の子どもたちの相互理解と友好促進のため、人形を交換し合う親善交流を呼びかけた。青い目の人形を日本に、日本人形をアメリカに。日本側の受け入れ窓口を渋沢が務め、約一二〇〇体の人形を受け入れた。

しかし青い目の人形は、第二次世界大戦中ほとんどが処分され、現在は約三〇〇体を残すのみとなった。

後記

私は、渋沢が色々な経験をし、日本と国民に良い道を考え、銀行設立や女子教育、青い目の人形の活動をしたのだと思った。また、関東大震災のときアメリカから一三万ドルを集めた行動力と人望に感銘を受けた。渋沢自身のためではなく「日本のために」と生涯をかけたのが素敵だなと感じた。